

まちの歴史通信

第52号
2009.9.1

9 黒沢村八溝山字胡桃平 胡桃（樹高二八米、樹齡二五〇年）
10 黒沢村八溝山字肥之塚 榆（樹高四〇米、樹齡七〇〇年）
国有林

11 依上村上金沢 公孫樹（樹高三五米、樹齡六〇〇年）法龍寺
12 大子町小学校 榆（樹高三〇米、樹齡五〇〇年）大子町
13 大子町 梅（樹高四米、樹齡四〇〇年）益子善次衛門
14 大子町上岡 桜（樹長一〇米、樹齡三〇〇年）八龍神社
15 大子町浅川 杉（樹高三八米、樹齡五〇〇年）熊野神社
16 袋田村袋田 桜（樹高二〇米、樹齡三〇〇年）袋田村

以上の内の四本（1生瀬の藤、2鉢杉、11法龍寺のイチヨウ、12だいご小学校のケヤキ）を今回撮影して展示している。
昭和十一年の関右馬允の本の紹介では、「年々猛烈な勢いで枯死していく県下の巨木を保存と記念のため詳細な写真入りの記念本を出版」と記されており、同書で、大子町の生瀬の藤については「幹周二米位の巨杉二本に巻き付いて居る状態は正に壯觀である」、鉢杉については「活力から云つても鉢杉は県北老樹の横綱格」、法龍寺のイチヨウについては「如信上人十三回忌法要を営み植え付けたと伝えられて居る」、だいご小学校のケヤキについては「安政元年八月に郷校として文武を学ばせたので此の櫻を『文武の櫻』と称する様になつた」とある。

鈴木さんは、樹齢を重ねたみごとな木々も「八〇年ほどがたち、四分の一ぐらいしか残っていない」という。
また、ひたち巨樹の会、川上千尋代表は「写真展によせて」で、「巨樹は緑の文化財であり、歴史の生き証人でもあり、環境の指標であります。」「地球温暖化が課題となる昨今、今回の写真展に、さわやかな緑の風を感じとつていただければ幸いです」という。巨樹を守る大切さを感じた一日であつた。（野内）

写真展「巨樹巡礼」から学ぶ

常陸太田市の鈴木實さんが、昭和十一年発行の関右馬允「茨城県巨樹老木誌」上巻に登場する巨樹老木を訪ね、「星霜八〇年、その巨樹老木がどのような変遷をしたかと思い」、その姿を撮影した写真展「巨樹巡礼」が水戸市の常陽芸文センターで平成二十一年六月二十一日～二十五日に開かれた。

今回撮影されたのはかつての久慈郡内にある巨樹老木。同書には一〇四本が取り上げられているが、現在も残る二六本のうち二三本を三年間かけて撮り歩いたという。

大子町について、関右馬允は一六本を紹介している。

1 生瀬村日照 藤（総長四〇米、樹齡二五〇年）斎藤友之介

2 宮川村下野宮 鉢杉（樹高五〇米、樹齡八五〇年）近津神社

3 宮川村上冥賀 相生の松（樹高二〇米、樹齡二五〇年）長山

徳兵衛

4 黒沢村町付 百日紅（樹高七米、樹齡二〇〇年）益子好

5 黒沢村上郷 百日紅（樹高七米、樹齡三五〇年）高徳寺

6 黒沢村上郷 梨（樹高二八米、樹齡三〇〇年）金沢嘉業

7 黒沢村上郷 けんぼ梨（樹高二四米、樹齡三〇〇年）金沢嘉業

嘉樂

8 黒沢村上野宮 榆（樹高三〇米、樹齡四〇〇年）近津神社

保内郷の発祥地、寄神権現を訪ねて

よりかみごんげん

飯村尋道

とある。『常陸紀行』では寄神保の古名の由来はこの明神にあるといつてはいる。ここには「寄神」という小地名が今もある。

八溝山南麓の大子町は、遠く奈良平安の頃は陸奥国白河郡十七郷の一つで依上郷といい、鎌倉の頃は依上保となつた。秀吉の文禄検地以後、奥州から常陸国に編入された。この頃、依上保内の旧二十四ヶ村は分かれて四十二ヶ村となつた。明治二年に旧一町八ヶ村に統廃合されて、昭和三十年の合併で今の大子町となつた。そのほぼ全域が依上保内の旧四十二ヶ村で、故にこれらの村々を総称して保内郷と呼ぶ。大子町の誕生から五十有余年、「保内郷」という親しみこめた懐かしい言葉も耳にすることも少なくなり（保内郷病院を除いて）寂しく思う。

この四十二ヶ村の中に塙村がある。奈良平安の頃、塙平辺りに官衙（役所）跡があつたと言われているが、塙平遺跡の調査からもそれが裏付けられている。また塙平の城山の依上城は「建武中興、朝廷、結城氏に命じ、保内を管せしむ」（『新編常陸国誌』）ために築城されている。このことからも昔の大子町の中心は塙の塙平あたりだつたのだろう。

依上の語源について、『水府志料』（小宮山楓軒）に「寄神保」といへるは近津明神に寄たる保なる故に号し」とある。近津明神とは「奥州一の宮」である白河郡七座の筆頭、棚倉町八瀬に鎮座する古社、「都々古別神社」のことである。依上の塙原勝善によれば、その昔、藤原勝善が大己貴命の神助により、此の地に棲む悪鬼を平治したことから、大己貴命を祭神とする祠を勧請したのが始まりという。藤原勝善は岩手の駒ヶ岳山上に鎮座する「陸中一の宮」の駒形神社の祭神で馬の守護神である。古來、馬産地である東北から北関東、特に茨城や栃木で信仰され、馬の無病息災を祈つて分社社がある。旧塙村の村鎮守で、明治七年に寄神権現から「依上神社」と名を改めている。この寄神権現の祭神は白河国造某とも伝えられ、『常陸紀行』（黒崎貞孝）には「久慈郡北郡を保内の郷といひて、昔時は廿四ヶ村也しが今は四十二ヶ村となれり。塙村に寄上明神あり。今寄上の古名此に存せる而已なり」



田耕月（為之介）である。碑文によれば、その昔、藤原勝善も書も旧宮川村下野宮の人、岡原勝善が大己貴命の神助により、此の地に棲む悪鬼を平治したことから、大己貴命を祭神とする祠を勧請したのが始まりという。藤原勝善は岩手の駒ヶ岳山上に鎮座する「陸中一の宮」の駒形神社の祭神で馬の守護神である。古來、馬産地である東北から北関東、特に茨城や栃木で信仰され、馬の無病息災を祈つて分社社が祀られた。村鎮守として五穀豊穣の神（大己貴命）と馬の神様（勝善神）を祀つたのだろう。

文政五年（一八二二）に野火で焼失し天保六年（一八三五）に再建、相川村吉成某奉納の石灯籠は元禄十六年（一七〇三）の建立である。社宝の大輳は水戸藩士、藤田東湖の書という。

【昭和の初め頃の農家】八】冬の仕事 木の葉さらい

秋の取り入れが終わると農家の仕事も一段落して、冬に備える仕事にかかる。

落ち葉をさらつて蓄えるのも大事な冬の仕事だ。落ち葉は馬小屋の敷き藁に利用する事が最も多い。これはやがて堆肥になるので農家にとつては大事なものだ。そのほか温床の発熱材としても利用する。周りを藁などで囲つて、中に落ち葉を敷き詰め水をかけて踏み固めて置くとやがて発酵が始まること。その上には土を載せここに種を蒔いて油紙やビニールで覆つておく。まだ寒い時期でも落ち葉の発酵による熱で発芽するので、露地よりも早く苗が出来る。ナス、キュウリなど

殆どの農家がお正月（旧正月だったから二月頃）の前に終わらせようと毎日のように山に登り木の葉さらいをした。木の葉さらいの方法は、先ず山の落ち葉を“くまで”といふ道具でかき集める。多くは傾斜地だから山の上の方から下に向かって掃きおろして出来るだけ下の方へ集める。今度は直径深さ共に一・二ヽ一・五メートルくらいの木の葉籠に詰める。その上に更に籠の高さの二ヽ三倍くらいに積み上げるのだ。これはなかなか難しい技術を要する。

まず木の葉の詰まつた籠を寝せて菰を敷き、その上に木の葉をしつかりと押し詰めるように重ねて積み上げる。その上にも菰を被せ、籠に棒を通して籠に着いている綱でしつかりと結わえ付ける。木の葉の詰め方が緩かつたり綱の結わえ方が緩かつたりすると、木の葉が崩れてしまう。用意が出来ると

冬の天気
のよい時期を選んで毎日のように木の葉さらいをやって、木の葉小屋一杯にする。春になつて草が伸びるまでの間馬小屋の敷き藁にするのでかなりの量が必要なのだ。

雪が降ると出来ないし、雨が降つても木の葉が重くて容ではない。だが、少し木の葉がしめつっていた方が積み重ねるには木の葉が崩れにくくて都合がよいのだ。

地方によつて方法に違いがあるが、この地方では以上のような方法だつた。最近ではネットの袋に木の葉を詰める方法が多い。これは簡単だし取り扱いも楽なので普及している。

今は木の葉を農業に使う事が少ないので、木の葉さらいをする風景はほとんど見られなくなつてしまつた。

A black and white woodblock-style illustration depicting a man carrying a large woven basket on his back, walking past a small wooden hut. The scene is framed by stylized trees on either side.



と籠を起こして背負う。重さはさほどではないが、背負つて
いる人の三倍くらいの高さになるから、途中の木の枝に

【資料紹介】大正三年『大子町々是調査書』について

明治四十二年（一九〇九）茨城県訓令第十三号「郡市町村は調査標準」により、明治四十三年九月に益子彦五郎町長を委員長として着手、「本町民のとるべき方針と将来の目的とする所に向かつて進行せんと欲するの経略」を大正三年（一九一四）に定めたのである。そのうち、「大子町の起源沿革」の項目を紹介しよう。ただし、文章は意訳している所がある。

本町の起源は、『和名抄』の陸奥国白河郡十七郷の内、八溝山東南の地、依上保二十四ヶ村の一つで、白河結城氏の支配下にあつた。保内は依上保の略称にして、白河郡に属し陸奥守の管下にあつた。元弘三年（一三三三）十月北畠頼家が鎮守府將軍となり、白河の結城宗広が依上保を管下する。ところが、足利尊氏が反乱を起こすと、常陸の佐竹氏がこれに応じ、一族の北酒出頼義をして依上保の地を押領せしめ其子義教、其の孫義長、依上保に拠り依上氏を称する。義長は子がなかつたので、同族山入興義（与義）の三子宗義を養嗣とする。佐竹宗家は、鎌倉公方足利持氏の執事上杉憲定の子義仁（龍保丸）が佐竹義盛の後継となる。応永二十三年（一四一六）十月の上杉禪秀の乱に興義は禪秀に味方して、依上宗義等百五十騎を遣わし禪秀等の兵と合じ、鎌倉公方足利持氏の邸を襲つた。その後、禪秀等は戦い敗れて鎌倉雪下に自殺、興義降りて比企に閉居する。応永二十九年足利持氏、上杉憲直に命じて興義の比企邸を囲んだ。興義は家人十三人と共に法華堂に入りて自殺した。

応永三十五年九月室町將軍義持が依上宗義が闕所の地、依上保を白河の結城弾正少弼に与えたので、康永（一三四二～一三四五）以降、佐竹の一族が地頭として支配した依上保は再び白河結城氏の支配下となる。

正長元年（一四二八）依上氏の一族、兵を挙げて依上城に拠

る。足利持氏は里見家基に命じて之を攻める。永享元年（一四二九）里見家基が依上城を陥落させ、結城氏家臣芳賀河内守を大子城を居城させた。永正七年（一五一〇）九月小峰義親は、その宗家白河結城政朝と争つたので、その内紛に乗じて、太田城の佐竹義舜が芳賀河内守を攻め滅ぼし、家臣の野内肥前守に大子の地を守らせた。佐竹義重は、保内足輕を置き、菅生・佐藤・菊池の三氏をして統理せしめた。文禄三年（一五九四）の太閤検地で常陸国久慈郡となる。慶長七年（一六〇二）佐竹義宣が出羽の秋田に移封、その後、水戸徳川氏の所領となる。

享和二年（一八〇二）四月水戸藩主徳川治保、四郡の制を廃し領内十一所に陣屋を置くに当たり大子にも陣屋を設け、郡宰を駐在させて保内の地を治めた。天保二年（一八三二）正月、水戸藩主徳川斉昭、四郡に郡宰を駐在させた。保内は北郡に属し、大子陣屋が支配した。斉昭は「文武の兼修」を目的に郷校として文武館を今の「だいご小学校」の地に建て、梅・桜・ケヤキなどを植えた。藩より毎月数回講師が派遣され、黒崎藤右衛門・久比が館守として講文、演武を監督した。なお、安政三年（一八五六）に開館式を行つている。

元治元年（一八六四）十月武田正生等一千名が那珂湊から大宮村、大沢村を経て大子に入った。武田勢（天狗党）は、水戸藩の追討軍市川隊と月居山に戦つた。その後、武田勢は西上することになり、矢田、下野宮から黒沢郷に入り、八溝を越えて下野に入る。この時、永源寺が兵火にかかり鳥有に帰した。

明治元年（一八六八）徳川昭武が水戸藩知事になる。翌二年十二月、昭武が領内を巡視、文武館に郷兵を集めて文武の練習をする。昭武は上岡村菊池六介方に宿泊、左貫村を経て大山田、武茂郷を巡視して帰藩する。

明治四年の廢藩置県で、水戸県の所轄となり、大子部と改称して青木少属が統治する。明治六年、水戸県を茨城県と改称し、村々に戸長・副戸長を置き、これを連合して区長を置いて行政

の事務を処理する。この時の戸長は菊池六介である。明治五年の学制公布により、文武館を大子小学校の校舎にあてた。明治七年に大子村に郵便局を設置、通信事務の取扱を開始する。

明治九年、郡区制に改め、第四大区三ノ小区に編入される。

大子村外十四ヶ村（大子・上岡・山田・浅川・楨野地・初原・左貫・田野沢・上金沢・下金沢・相川・塙・芦野倉・矢田・南田氣）を連合して事務取扱所を上岡に置き、副区長岡山忠恕、戸長菊池六介、戸長吉成東七郎が事務処理を行つた。明治十年に字本町に屯所を設け、翌十一年に字横谷河原に分署を建築、太田警察署大子分署となる。

明治十一年、野内熊三が大子郵便局長となり、明治十五年には為替貯金の事務を開始する。明治十二年、事務取扱所を廃止して郡役所を太田町に置く。連合村には戸長役場を置き諸般の事務を処理させた。この時、大子・矢田・池田の三村が連合して戸長役場を池田に置いた。戸長は菊池久弥である。また、浅川・上岡・山田を連合して戸長役場を浅川に置いた。戸長は長山介次郎勝敏であるが、明治十五年には菊池六介が戸長となる。明治十七年に大子村外六ヶ村（矢田・池田・浅川・上岡・山田・芦野倉）が連合して戸長役場を字金町に置いた。戸長は菊池六介である。明治十八年、不動産登記法施行により、大子連合戸長菊池六介が登記事務を取り扱う。明治二十年に字天神前・山田・浅川の四ヶ村が併合して大子村となり、村役場を字本町に置く。村長菊池武保（六介の改名）、助役益子彦五郎である。村委会員は選挙により、十二名が選ばれた。大子から益子彦五郎、皆吉俊之介、益子恵、八代安吉、吉成喜代松、上岡から菊池武保、永瀬敬之介、浅川から長山勝敏、長山道珍、武士新介、松浦濱雄、山田から會澤貞次郎である。

明治二十三年二月十七日、火事により大子尋常小学校の校舎が焼失する。同年八月七日久慈川の大洪水あり。増水二丈二尺にして、大子警察分署をはじめ民家十三棟流失（後、泉町南側に改築する）、町家の過半は全部浸水する。金町通りの久慈川沿岸のケヤキ数十本が流失する。このケヤキは、治水の一策と風致を添える目的で植えられたものであつた。また、二代水戸藩主光圀が備荒貯蓄のため領内各所に倉庫を設けた。矢田には六棟あつて、碑など五千俵を蓄えていたが倉庫と共に全部流失した。倉庫の周りの杉大木数十本もすべて流失した。この洪水による本町の被害は、「浸水家屋三百五十余戸　流失家屋十三棟　溺死二人　溺馬二頭　田畠被害三十六町歩余　道路破壊千五百間余　橋梁流失二十箇所余」であった。

明治二十四年八月一日大子村を大子町と改称する。明治二十五年小学校令改正により、久慈郡第二高等小学校を廃して大子尋常小学校に併置し大子尋常高等小学校と改称する。同時に校舎を廃棄し売却した。同年町役場を文武館跡の地に改築する。明治二十六年大子郵便局に電信を架設して大子郵便電信局と改称した。局長は野内熊三である。明治二十七年八月一日の日清戦争開戦するや全町民が軍資金の献金、国債応募、出征軍人家族の保護等に非常なる熱誠を以て当たつた。

明治二十八年十一月七日皆吉俊之介が大子町長に当選するが、翌年十二月事故により退職する。明治二十九年十二月益子彦五郎が大子町長に当選する。明治四十一年十二月野内立介が大子町長に当選するが明治四十三年三月病気により死去する。同年六月益子彦五郎が再び町長に選ばれた。

また、明治三十年度に大字大子区発展の一策として植林事業を計画し、区有地の字槐沢へ十年継続計画で杉の植林を始め、明治四十一年度までに十四万三千二百本を植林する。区有地の字ウツボ沢には大正三年度（一九一四）までに六万三千本の杉を植林したのである。

新聞記事にみる満州移民の断片（三）

—第九次冷家店大子町開拓団の軌跡—

本誌第五〇号で筆者は、茨城県の満州分村計画協議会の構成員でもない大子町がいち早く満州分村計画を決定し、昭和十五年一月十八日に先遣隊員らが渡満の途に着いたことを紹介した。「分村移民」という形での渡満は茨城県では初めてであった。その頃、県内の他の町村では分村に絡むどのような動きがみられたのであろうか。本稿では、「いはらき」新聞を手掛かりにして若干整理してみたい。

ちなみに、県が組織した前記満州分村計画協議会を構成していたのは、次の「一〇カ村」である。東茨城郡竹原村、西茨城郡北山内村、同七会村、那珂郡額田村、久慈郡小里村、同賀美村、同黒沢村、結城郡名崎村、同豊田村、真壁郡竹島村（昭和十四年十月三十一日付）。大子町域では、黒沢村だけが名を連ねていた。

『茨城農報』（昭和十四年十一月号）が、「大子町の單村分村は全国的に茨城に大陸建設の健児在りの認識を深め併せて他の指定村十ヶ村の人々に多大の教授を与へるものである。実に他の指定村十ヶ村の連合を以てしても大子町單村分村に比較し得ない実状だからである」（『大子町史 資料編 下巻』）と述べているように、分村移民への一足早い取り組みは前記「一〇カ村」に対して何らかの刺激を与えたものと思われる。

同じ保内郷に位置する黒沢村の動きは急であった。「黒沢村大陸熱」と題する記事は伝える。「この程経済更生委員会を開き北満移民百戸を送る事に決定、十六日町付十七日上野宮の部落で大陸映画会を開き、引続き部落懇談会を催して趣旨の徹底を計り国策の遂行に協力する事になつた」（昭和十五年一月十八日付）、と。また二月八日付では、「満洲分村熱旺盛」との見出しで、第

九次先遣隊員を招聘して満州分村に關する講演会を開催することを告知するとともに、「同村における渡満熱は：向上の一歩を辿り黒沢村では現在分村希望者十五家族に達してをり」と述べている。同記事は、七会村でも同じ講師による講演会が行われ、「渡満熱」は向上していると指摘した。三月六日付をみると、三人の黒沢村民が長岡村の農民道場に入り訓練後に渡満することが分かるが、ただしこれは分村移民ではない。

賀美村の動きも伝えられている。昭和十五年一月二十日付は、「満洲分村熱はいよいよ軌道に乗り來り五ヶ年計画で三百名突破の参加者を予想されてゐるが二月十五日までに卅名を先遣せしむることとなり廿日午後一時から小学校に村民協議会を開くことになつてゐる」と伝えた。しかし、その続報はない。

もう一つ、前記「一〇カ村」には入っていない山方村の動向が把握できる。昭和十五年二月二十日付は、「集合開拓団を組織山方村の分村計画いよいよ実現 近く北満へ先遣隊送出」との見出しで次のように伝えている。「時局の脚光を浴びて大子町分村計画が実現、既に先遣隊は入植し本隊員四十余名も四月中旬早期入植することになつてゐるがこの逞い大陸進出の息吹に呼応して更に那珂郡山方村に集合開拓団が組織されるに至つた、」数は五十戸、入植地は第七次大口川開拓団の隣接地で四月早々廿五名が先遣隊として渡満する予定である。大子町に触発されたかのような指摘は興味深いが、残念ながら山方村についても続報はない。

この他にも「新満洲へ分村推進 第九次移住対策協議会」（昭和十五年十一月二日付）、「県下における大陸進出熱は日を逐ふて昂まり各地方に分村分郷の計画が樹立されつゝある」と伝える「県北地方 渡満者続出 今月末に分郷計画協議会」等の記事が散見されるが、分村は実現していない。大子町に次いだのは、十七年七月に分村決議を行つた笠間町のみである。（齋藤）

忠魂碑（三）～旧依上分館敷地内の忠魂碑問題～

現在、依上地区の忠魂碑は、旧依上分館敷地内に建設されてゐる。依上地区の忠魂碑は、大正十二年（一九二三）七月に女倉山麓に建設されたが、道路の改修工事により、昭和五十三年三月現在の地に移転したものである。

忠魂碑の裏側に次のように記されている。

此の碑は大正拾弐年七月時の依上村長塚田忠治郎氏在郷軍人分会長野内甲一氏外役員の尽力に依り女倉山麓に建立成りしも此の度県道拡幅の為此の地に移転す

昭和五拾参年戊午年三月

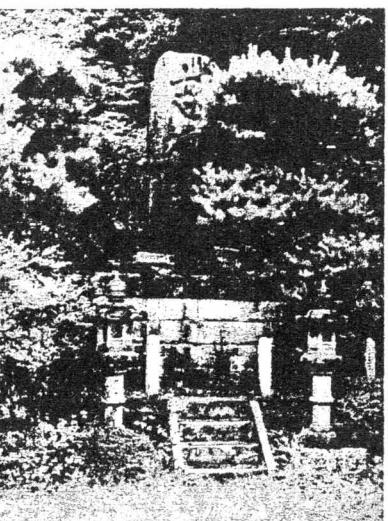
移転委員会

委員長 木澤 常松

委員 中野 旭 須藤常之助 大森 正 軍司 軍平

綿引 芳邦

忠魂碑の前を走る道路（現国道四六一号線）は、女倉山麓と押川の流れに沿つた狭隘な道路であり、交通量の増加は常に危険がともなつていた。忠魂碑の背後は急峻な女倉山の岩盤が露



依上地区の忠魂碑
(旧依上分館敷地内に建つ)

出し、碑の前方は、道路と平行して押川が流れているため、道路を拡幅するに移動しなければならぬ

ない状況下にあつた。そのため大子土木事務所から移動の要請があり、現在地「旧役場支所・当時依上分館敷地」に移転をしたのである。そのいきさつについて、議会で取り上げられる。社会党議員の通告質問（A）と当時の町長（B）助役（C）の答弁の中にみられるので紹介する。

A 依上分館敷地内に忠魂碑が建つてゐる。五十三年に建てた

そうでありますけれども、これは、どういいういきさつで建てたのかお伺いをしたい訳ですけれども、これは今までの新聞報道などによると、憲法に抵触するのではないのか。憲法の八十九条には、「公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のために、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。」というふうに明確になつております。これは最高裁の判例も出でている問題でございますが、深く追究するつもりはありませんが、町が誰が許可されたのか。こういう指摘を社会党にされて、どう対処をするのか。このことについてお伺いしておきたいと思います。

B 誰が許可したかといふ問題ですが、最終的には町長ということになるわけでございまして、町長が許可したものでござります。

C 依上分館敷地内の忠魂碑建立のいきさつ、町の態度と今後の方策ということについてお答えいたします。

あの忠魂碑は、大正の半ばのころ、依上村が造つたものでございます。従いまして旧村の財産でございまして、地区といたしまして昭和二十五年ころ、町村合併の二、三年前に忠魂碑の掃除と管理をする会ができまして、それが村から委託を受けまして掃除をしていたのが実情でございます。五十三

八月十四日の大子町花火大会と灯篭流しも盛会のうちに終了し、暦はもう九月、朝夕が寒く感じてきました。

さて、今年は水戸藩開藩四〇〇年にあたります。この機会に幕末の歴史を探訪し、郷土の歴史を現地で学び大子町を再発見するため、今年も「ふるさと歴史講座現地めぐり」を二回にわたり開催します。歴史に興味のある方、関心のある方の参加をお待ちしております。

(斎藤裕也)

◎第一回 期日：平成二年九月二七日（日）

主な見学場所：関鉄之介歌碑、桜岡家邸宅と蒟蒻会

所跡地、徳川齊昭歌碑、高柴穴観音

募集期間：八月二十日（木）～九月十日（木）

◎第二回 期日：平成二年十月十七日（土）

主な見学場所：県立歴史館、偕楽園、弘道館、静神

社（桜田門外の変の斎藤監物墓）

募集期間：九月十八日（金）～十月二日（金）

今後の方策ということについてでございますけれども、そもそもとが依上地域の過去の歴史のひとつ。ふつうならば史と言うのでしようが、石へ刻んだ史だと私は、考へているわけでございます。従いまして大子町は長い間かかつて大子町史を編さんして、これから近代史に移ろうとするとき、非常に文化のよりどころのない依上でございますので、将来の大子町史編さんの時にああいうものが役に立つのではないかとうことで、大切に保存してまいる覚悟でございます。

以上、忠魂碑の旧依上分館敷地内への移設のいきさつについて、当時の議事録をもとに紹介したが、第一回の答弁では、通告質問者の「憲法抵触問題」については、触れられていない。紙幅がつきたので次号で紹介したい。

（小澤）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付
久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 0295(72)2627